

バーバラさんがみた

日本の若者のジェンダー意識

西東京市在住のバーバラ・イェツさんはアメリカ・アイオワ州の出身。大学卒業後弁護士としてドメスティック・バイオレンスやセクシュアルハラスメントに取り組んでいました。学生時代のフェミニズム活動で女性の自己防衛として合気道を身につけ、日本にはその修業が目的で来日。以来二十五年間女性問題、人権問題の活動家として、また大学で女性学現代社会学の教鞭をとるなど忙しい日々をおくられています。

長年、日本の若者たちと接し、指導してこられたバーバラさんから見た日本の若者たちのジェンダー意識、その変化などのお話を伺いました。



武道場でのバーバラさん

■若者は変わりましたか？

八七年頃大学の授業で同性愛やセクシュアル・ハラスメントなど性の問題を取りあげたところ、学生たちは非常に驚きショックを受け「授業で取りあげるのはおかしい」という学生もいました。今の学生たちは興味を示して冷静に受け止めます。また当時の女子学生は結婚は当然のことでしたが、今のジェンダーに興味をもつ女子学生の四分の一が結婚しない、したくないという意見を持つなど、意識は急速に変化しています。女性の二分の一以上が仕事をもち、一般職・総合職の制度や男女雇用機会均等法の制定、男女平等施策など、社会的条件や教育が変わったことが原因でしょう。女性たちが結婚したくないという理由には、女性だから自由に生きられない、仕事が続けられないかもしれないという不安があるのです。家事・育児は女性の責任という伝統的役割分業意識が残っているからです。アメリカにもまだ残っています。また結婚するか、一人で暮らすかの二つの選択しがなく、本当の自由社会ならば様々な生き方や選択の幅が見えるのですが、まだそれが見えない現状が問題だと思います。一方、男子学生はまったく気にしていません。「家事・育児にも責任を持ちま

す」といいますが、社会の組織や構造がそれを許さない現実にはやがてぶつかります。解決するのは社会の意識や法制度にあるのですが、個人レベルで解決できるという考え方が強いですね。家事・育児の中身もまだよくわかってはいません。

■ジェンダー意識はどうですか？

ジェンダー意識は進んでいます。しかし学生たちが性別を意識したのは小学校以前なのです。男子は泣くな。女子はやさしくと言われ、女子だけ家事を手伝わされるなど、家庭の中に無意識の性別役割分業意識があります。大学の合宿でも男子学生はテニスを運び、女子学生はお茶を入れるなど、無意識に行動しています。

またすべての男性はすべての女性より強く、力があるから守るといっているのは間違っています。欧米人は東洋人より大きく力も強いので守るべきとは思えないように、人種レベルでは理解できることが、性レベルではなぜわからないのでしょうか。

フェミニズムを考えるうえで合気道の精神は良いヒントになります。力をぶつけないで相手と合わせる考え方で、このコンセプトが大切です。長くやっていると精神と身体の関係もわかり、勝ち負けの問題ではなくなります。精神を強くし自己主張し自信をもつために役立ちます。

■社会は変わりましたか？

昔より良くなっているのではないです

か。昔は、慰安婦問題、戦前の家父長制での父親のコントロール、ドメスティック・バイオレンスもありました。しかしそれらは当り前の事として表面化しなかったのです。でも今は、女性問題が取りあげられ、男女平等意識の高まり、女性の地位が向上するなど、社会の意識が変わったから問題が表面化するのはないですか。それにしても若者たちの性犯罪は大きな問題です。

今の若者たちは男女平等意識をもっていません。人権や平和問題などに興味や関心があり、ボランティアや学習、研究もしています。彼等は考えていますが個人的ですね。政治への興味や活動はありません。参政権はもっているのに。私たちがおとなが導かなければいけないでしょう。活動家や大学、女性センターなどの連携、情報、教育、交流が大切です。

「ジェンダーハラスメント」の視点からは同性愛者の権利の尊重も重要です。今の学生たちは権利を尊重すべきと答えますが、自分に置き換えると悩むと答え、まだ建前でしよう。しかし意識は変わっていくと思います。

でもまだまだですね。フェミニズムの活動はまだ続くと思います。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

フェミニストとして地道な活動を続けてこられたバーバラさんの言葉には、未来に希望を持って若者たちを応援する力強いやさしさがありました。